

*** 教育理念の根幹として ***



「いのちとねうち」と読みます。昭和35年（1960年）4月7日、新入生たちが初めて一つになった第1回入学式の式辞に建学の訓として登場したことばです。「新入生諸君。この学校にはどのような生命があり価値があるのか。そしてこれに相応して諸君ひとりびとりにどのような生命があり価値があるのか。私はいま諸君にこのことを、この学校の誕生日に際して、トクと考えていただきたいと思うのであります。（中略）人間が本来自分に与えられた生命と価値とを高められるだけ高めるために、どのように努力しなければならないのか。これらのことをよくよくかみしめていただきたいのであります。」と小田桐孫一初代校長が呼びかけました。

この言葉はスイスの聖者的思想家カール・ヒルティのベルン大学総長就任演説の引用とともに示されました。学校には立派な校風の保持が一層重要であり、また敵対的な思いを抱かせないように造られなければならないとの理念から、人間性豊かな良識ある実働する中堅実業人の養成のため、「生命と価値」を探究する人間の育成をめざしています。

*** 校 旗 ***



牡丹色の由来 —

校旗の色は、合併前の両校のスクールカラーを混ぜ合わせることで生まれた色です。旧市立女子高等学校の「ブルー」と旧市立弘前商業高等学校の「エンジ」を主に合わせることで、美しい「牡丹色」になったのです。校旗樹立式は昭和38年1月20日（昭和37年度）です。東京高島屋デパート製作で生地は「綾織錦地」「金モール」の豪華版。竿頭は「卍」です。

*** 座右の銘として ***



第1体育館や各教室の正面に掲げられている言葉で、県文化賞受賞の書家・石倉守拙先生の墨痕です。この扁額は昭和38年（1963年）1月20日、中央体育館落成記念式典において初めて披露され、「歩歩清風、これこそ日日これ修練なる諸君の学校生活の精神的基盤でなければならない。一步あゆむごとに、自分の周囲に清い風を吹き起こすように生きなさい。一番高いものを目指して一步一步進むように努力するならば、平凡は平凡なりに非凡になりうると信ずることです。」と初代校長が呼びかけました。

京都大学の湯川秀樹博士（日本初のノーベル物理学賞受賞者）が学生爾来の恩師である西田幾多郎博士（日本哲学京都学派の創始者）から授かった銘です。

この語は、京都の参禅会（1304－1306年）で南浦紹明禅師が語った言葉です（『大応国師語録卷下』）。唐の肅宗皇帝と南陽慧忠国師の問答（『碧巖録』第99則・肅宗十身調御）について聴講者へ問いかけ、その答えがこの言葉です。原文を通釈すると「うぬぼれや慣習にとらわれず、世俗の価値観を打ち破る覚悟を持って、人に頼らず自分の力で積極的に一步一步歩いていると清らかな風が吹き起こる悟りの境地にいたる。」となります。「悟りの境涯に入ると一步一步瞬間ごとに新しい世界が目の前に開けてきて、新鮮な感動が起きる。また、修練を積んだ挙措の美しさを指す。」と解釈されます。

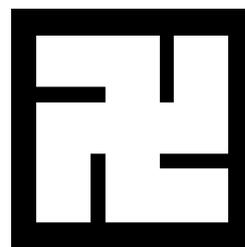
*** 校章 — その由来 ***



牡丹紋



校章



卍紋

弘前市立実業高等学校となった昭和35年に校章特別委員会が発足し、在校生および卒業生から案を募集したところ、606の応募作品が集まりました。校章特別委員会において、それらの中から10点を選び、職員および生徒の投票により得点の多かった作品を元に小林澄雄先生が3種の原案図を作成し、合同職員会議でその中の1つを校章として決定したのが現在の校章です。

近衛家から許されて津軽家の紋章となっている「牡丹紋」と、津軽家の旗印で弘前市章にもなっている「卍」（まんじ）とを組み合わせています。

牡丹紋

牡丹は、もともと近衛家の紋です。牡丹は胎蔵界曼陀羅の表徴で、子孫繁栄を祝福する意味を持ちます。

津軽家が近衛家からいただいた杏葉牡丹は菊・桐・葵について権威ある紋章です。牡丹紋使用は、公卿では近衛・鷹司・難波3氏、武家では上野矢田の松平・伊達・津軽・島津・鍋島の5氏です。

卍紋

津軽統一に成功した為信の旗印は卍です。卍は太陽を表わし、仏教上では吉祥の相として万徳の集まる所の意味を持ち、寺院のシンボルとして使われてきました。